

国際社会福祉会議の周辺

ー I F シンポジウムよりー

阿 部 志 郎

28年ぶりに東京で開かれた三つの国際社会福祉会議は、高い評価を受けつゝ幕を降ろした。正直に言って、ソーシャルワーカー・シンポジウム（以下「シンポ」と略す）を終えて胸をなで下ろしている。けれど国際会議の終了は、世界社会福祉に対する日本の幕開けであり、これを機に新しい時代に入ったと言うべきであろう。そこで将来のために、「シンポ」開催に至る背景とその周辺のいくつかの問題について、メモとして書き記しておくことにする。

I

1982年、イギリスのブライトンで第21回国際社会福祉会議が開かれた折、86年の第23回会議開催を日本は正式に受諾した。そして、翌年、厚生省は、政府として国際会議を全面的に支援する旨を国際社会福祉協議会に意志表明した。

この時から、私達の苦悩は始まった。国際社会福祉協議会（I C）と併行して、同一の地方で、国際社会事業教育会議（I A）と、ソーシャルワーカー・シンポジウム（I F）が開かれるのが慣例であるのに、「シンポ」準備の主体となるべきソーシャルワーカー協会が日本に存在していないからである。「シンポ」をどうしたらよいかは、一人のソーシャルワーカーとして頭痛の種となった。国際ソーシャルワーカー連盟本部では、「シンポ」は別の場所で計画しなければと秘かに覚悟したといわれる。

東京会議が開かれることが決定した以上、「シンポ」も東京でする責任があると仲村優一教授をはじめ関係したソーシャルワーカー達は、心に期するものがあった。

II

幸なことに、「シンポ」と別次元で、ワーカー協会再建の機運が熟しつゝあった。この国内の動きに拍車をかけたのが「シンポ」への責任であったのは疑う余地がない。

漸く1983年秋に、日本ソーシャルワーカー協会設立に漕ぎつけることができた。しかし、設立発起の賛成者は2百余名にすぎず、とても「シンポ」を開ける組織とはいえない。けれど「シンポ」開催を決意し、1984年夏モントリオールの国際ワーカー連盟総会に、加盟申請をした。この時全員数は700名に達していた。圧倒的支持をえて加盟は承認され、連盟も日本開催のメドが立ったと喜んでくれた。「シンポ」開催について、事務局長と懇談の機会があったが、内心、まだ2年の余裕があるとのんびり構えていたのは否定できない。

ワーカー協会は、再建間もなく、地方協会設立、専門職の研究、倫理綱領作成、研修、機関紙発行に迫われ、「シンポ」の準備にまで及ぶべくもない。国際委員会を組織し、平本善一氏を委員長に国際理解を抱く人々を委員に委嘱するだけで手一杯の状態であった。

III

1985年春に、国際ワーカー連盟のJ・トーマス会長と、アジア担当C・デ・レオン副会長が来日し、日本側の上原美智子プログラム委員長らと、「シンポ」準備の基本的打合せをしたのを契機に徐々に体制を整えることになった。この頃には、あと一年しかないという焦燥感にかられたものである。

夏には、上原委員長をジェネバに送り、執行委員会に準備状況を説明し、意見を交換し、調整をはかった。

さて、東京会議のために、国際社協日本国委員会、日本社会事業学校連盟、日本ソーシャルワーカー協会の合意により、統合事務局が設けられており、国際会議企画室が誕生していた。この発想はモントリオール方式に倣ったもので、東京会議が成功裡に終る原動力となった。この協働体制の中で、IAの小島蓉子プログラム委員長、福田垂穂組織委員長を代表とする委員会とIFの上原・平本両委員長を中心とする委員会の密接な連携プレーが可能となった。企画室の存在なくして「シンポ」は開催不能であったと記しても過言ではない。

三者によるティームプレーを、今後、国内と国外の社会福祉の推進にどう生かすかが、課題として残っている。

「シンポ」の準備・実施に当っては、企画室の仕事を分担する形で、平本・上原両委員長に古瀬徹教授がプロジェクトを組み、村馬節子、奥野英子氏等数名のボランティア協会員とともに、組織・運営・プログラムを執行し、会期中は筑前甚七事務局長、伊東よね氏をはじめ20数名の協会員が運営事務に協力した。その活動は献身的であった。

これらのボランティアは、殆んど協会の国際委員であるが、少数の人々の奉仕に依存し、負担をかけすぎたことは、反省材料である。

IV

カナダのソーシャルワーカー協会は、モントリオールでの国際会議の、実質的な準備・運営の担い手であり、また、カナダのなかで最大の力を備えた福祉団体であるが、モントリオール会議の経験からか、次回開催国となる日本に対して、特に弱少の日本ワーカー協会の開催能力への危惧もあったであろうが、はじめから好意的であった。

85年11月に、カナダのワーカー協会が、スプレーン教授をコーディネーターとして筆者を二週間招き、各地で講演会、懇談会を催してくれた。東京会議への招

待、日本社会福祉・ソーシャルワーカー協会等について説明する機会が与えられ、助言や、あたたかい励ましを受けた。特に、モントリオール会議のノウハウを詳しく教示してくれたので、東京会議に役立てることができた。

約1万人の会員を擁するカナダのワーカー協会は、地方協会が独自に活動しているが、全国的にも連繋がよくとれている。100余名の途上国参加者を受入れ、モントリオール会議出席、旅行、研修、宿泊、見学をすべて協会員が分担したのは注目すべきであろう。

日本のワーカー協会が、カナダの友情にどれほど力づけられたことか。心から感謝する。

V

「シンポ」開催の時、ようやく会員は1,000名を越えたが、その中から244名の会員が会議に出席してくれたのは心強い限りであった。

国際ワーカー連盟総会で、日本から上原美智子氏が執行委員に推し、幸い多くの国の支持を受け選出されたことは大きな喜びである。弱体な日本協会として、委員会出席に個人負担を願わねばならぬことが心苦しいが、このことは、今後、日本の枠の中にとどまることを許されず、国際的責任を負わねばならないとの自覚を深めさせてくれた。

総会での役員選挙の過程を通して、他団体も事情は同じであろうが、複雑なダイナミックスが作用していて、依然としてヨーロッパ中心の体質から脱け出せずにいるが、北米とヨーロッパの一部がアジアへの期待を強めているのには励まされるものがあった。アジアから会長が選ばれる日は決して遠くはないであろう。

それにしても、国際連盟でも「シンポ」でも女性の活躍が目立った。歴代会長にしても、一名の例外を除きすべて女性である事実と比較して、わが国の実情が男性優位であることに、内心忤ねたるものがある。執行委員に日本から女性を送り出せたことに、せめてもの希望をつなげればと願っている。

国際ワーカー連盟は決して強力な団体とはいえない。51ヶ国の協会が加盟しているが、事務局長が非常勤の有様では、十分な活動は期待しうべくもない。規模に多少の違いはあっても、IC・IAも夫々厳しい財政状況に直面している。東京会議ほど大規模な集会を2年毎に開催するのは容易でない筈である。にもかかわらず、会議を開かなければ組織維持ができない構造であるところに矛盾がある。開催国の犠牲と負担において会議を開く現状をいかに打開するかは、問題点だと考えられる。

Ⅵ

世界レベルで観察すると、ICを含めて指導者層に世代交代の時期が迫っているように見受けられる。アジアでさえ40代の若い指導層が急激に台頭してきている。この点、日本は一部のエキスパートとみられる人々に重荷が集中し、後継者養成に立遅れたことを指摘しておかなければならない。今回の国際会議が、若いソーシャルワーカーが国際化に関心をもち努力する契機となることを期待してやまない。

モントリオール方式を継承した一つは、途上国参加者への援助である。いくつかの団体の協力によって、

結果的に会議執行に大きな役割を果たす130名の人々を招待できた。「シンポ」参加者の推薦も認められたことに謝意を表しておきたい。それにしても、東京会議滞在に3ヶ月分の給料を要したとの嘆きの声を、20数年前類似の経験をもつ筆者は、心に痛みを覚えながら聴いたことであった。さらに、IAとの協同でバザーと連帯基金が60万円確保され、二年後の会議の途上国参加者援助に献げることができたのは、思わぬ副産物といっってよいだろうか。

「シンポ」に中国から2名の代表と1名の通訳がオブザーバーとして参加し、錦上華をそえたといえよう。中国の参加には、なおデリケートな問題が伏在しているが、中国の国際福祉への関心には並々ならぬものがある。日本のワーカー協会との交流・交換を相互に検討課題とすることになっている。

ともあれ、「シンポ」は日本の協会とワーカーに対してインパクトを与えたことは間違いない。これが、日本の社会福祉、さらに、これからの世界の社会福祉にどのような影響を与えるかを、静かに見守りたいと思う。

